あ み だ 原 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村
あみだ原遺跡緊急発掘調査報告書

1 9 8 0

宮田村土地開発公社
宮田村教育委員会

あみだ原遺跡

長野県上伊那郡宮田村

あみだ原遺跡緊急発掘調査報告書

1980

宮田村土地開発公社

宮田村教育委員会

序

このあみだ原遺跡は、村の東方つつじが丘団地につゞく段丘上にあり、宮田村土地開発公社が、工場団地造成を目的に買収した土地である。面積は約25,000平方メートルで、大部分は山林であるが一部は桑畑であった。古くから土器片が表採されていた。これより東方約500メートルに弥生時代前葉の狐塚遺跡があり、これとの関係なども注目されていた所である。

今回開発公社の委託により、宮田村教育委員会の編成した調査団によって緊急発掘調査が行われた。

その結果弥生時代後期の住居址1軒、平安時代の住居址1軒、土坑遺物等多数が出土した。

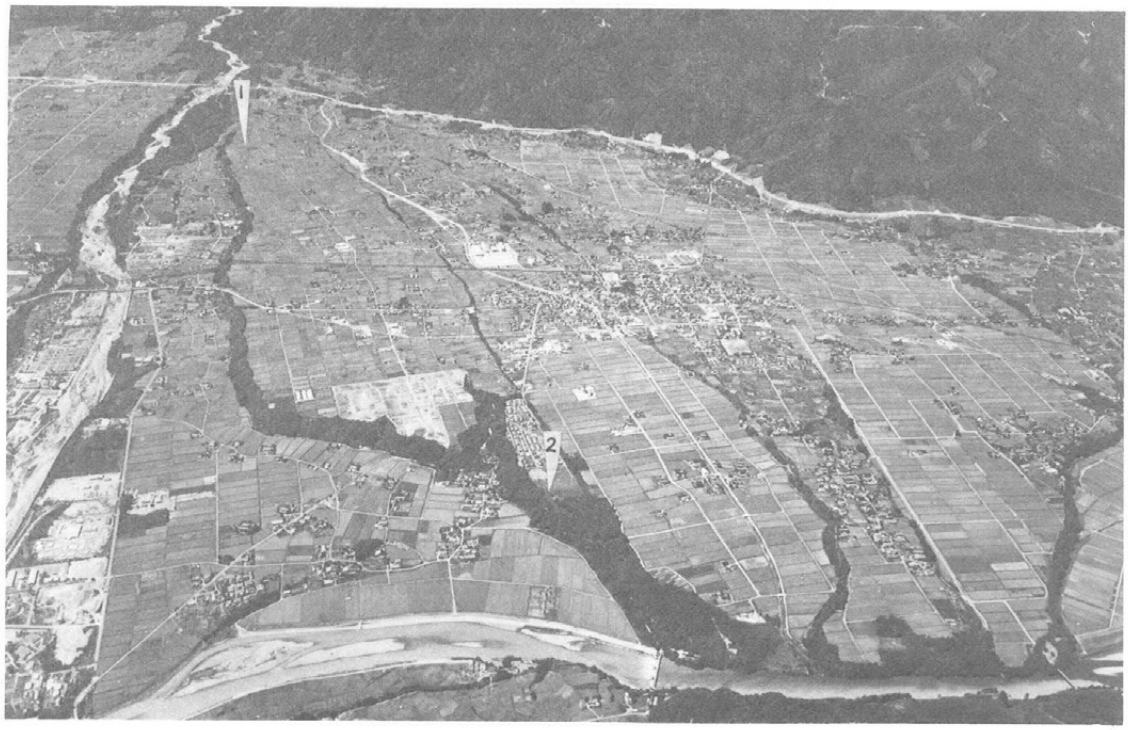
これにより、縄文中期後葉と平安時代の復合集落遺跡であることが判明したことは大きな収穫であった。

いづれにしても、狐塚、西垣外、滝ケ原、そしてこのあみだ原を結ぶ遺跡群の研究は、今後の大きな課題であろうと思われる。この報告書がこれらの研究の一助ともならば幸である。

昭和56年正月

宮田村教育長　　林　金茂

宮田村とあみだ原遺跡(東方より)



例　言

1　本書は、宮田村土地開発公社が計画した、工場団地造成工事に伴うあみだ原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本文執筆は、友野良一が行なった。

3　本書に使用した写真の撮影は、唐木孝治・東野広次・友野良一が担当した。

4　資料作成では、石器実測を東野広次が、土器拓影は白鳥あき子が担当し、図面の作成は、保科徳子・下島早苗が担当した。

5　本書の編集は宮田村教育委員会が行った。

6　本遺跡の発掘調査は、宮田村土地開発公社の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し実施したものであり、実際の発掘調査では下記の方々の協力を得た。

(1)　発掘参加者名簿

団長　友野良一・大沢　実・藤川周一・伊藤柳治・本田甲子雄・唐木孝治・小田切　一・酒井保三郎・小田切喜三郎・宮沢市雄・吉沢正広・小田切善明・小田切政男・保科徳子・林　美弥子・小田切房子・白鳥あき子・下島早苗・下平博幸・田中浩行・太田　徹

カメラ　唐木孝治

(2)　教育委員会事務局

教育長　林　金茂・教育次長　森下　清・事務　古河原正治・平沢美智子・伊藤依男

目　次

Ⅰ　**遺跡の概観**…… 1

遺跡の立地…… 1

地質・層序…… 1

Ⅱ　**調査の経過**…… 2

Ⅲ　**調査の結果**…… 3

(1)第1号住居址…… 3

(2)第2号住居址…… 4

(3)溝状遺構と石橋…… 5

(4)土坑…… 6

Ⅳ　**所　　見**…… 7

図1　あみだ原遺跡…… 1

図2　層序…… 1

図3　グリッド設定図…… 2

図4　第1号住居址実測図…… 3

図5　灰釉出土状況…… 3

図6　第1号住居址カマド実測図…… 3

図7　第2号住居址実測図…… 4

図8　第2号住居址…… 4

図9　溝状遺構の実測図…… 5

図10　溝状遺構…… 5

図11　石橋実測図(丸山井)…… 5

図12　第2号土坑実測図…… 6

図13　第1号土坑実測図…… 6

図14　第1号土坑…… 6

図15　土器・拓本・石器実測図…… 9

図16　石器・土器実測図…… 10

図17　大久保西垣外住居址出土土器…… 11

図18　大久保遺跡分布図…… 12・13

図19　第1号住居址…… 14

Ⅰ 遺跡の概観

1　遺跡の立地（図１）

宮田村は、木曽山脈と赤石山脈によって囲まれた間を流れる天竜川の右岸側にあたる。この天竜川右岸地域は、伊那谷特有の「田切地形」を形成しており、本村はその内の太田川の扇状地に属している地域である。今回調査が行われた「あみだ原遺跡」は天竜川が伊那峡でせばめられた場所が再び西南に向って広がった地点に、太田切川が合流する。その中間の右岸段丘上に位置している。遺跡の北側は小田切川の右岸段丘上にも当っている。また、駒ケ原三つ塚上のあたりに源を発すると思われる堂沢が作った大久保扇状地左岸段丘上でもある。遺跡地の標高は623.93～624.93ｍの間に所在している。

この「つつじケ丘」・「あみだ原遺跡」は、大東亜戦争中、食料増産のため開墾された所である。昭和40年つつじケ丘住宅団地が造成され、つづいてつつじケ丘グランドがつくられた。このグランドの東下牧・大久保線より東側は一部畑地と、あとは森林が大久保中越線まで続いている。この区間を宮田村土地開発公社が買収し小規模工業団地に造成されることになり、埋蔵文化財包蔵地事前調査となったのである。

2　地質・層序（図２）

本遺跡の基盤をなす太田切川扇状地には、第三期の緑泥変岩、硬砂岩等の岩石が下層に堆積し、その上部に太田切川の岩石である班状花崗閃緑岩・縞状片麻岩・黒雲母花崗岩等によって洪積台地が形成され、その最上部に新期ロームが堆積した地質構造である。

層序　1層…45～50cm耕土層　　2層…10～20cm黒褐色層　　3層…40～70cm赤褐色層
4層…130～150cmローム層　5層…50～60cm砂混りローム層　6層…10…20cm小石混りローム層
7層…10～50cm砂礫層　　8層…10～30cm砂礫層Ⅰ　　9層…10～35cm砂礫層Ⅱ

図１　あみだ原遺跡

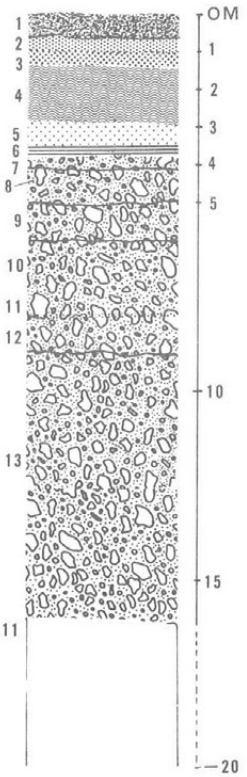


図２　層序

Ⅱ 調査の経過

つつじが丘・あみだ原の両地籍は、戦時中食量増産のため開墾されたところである。その後昭和40年住宅団地として造成され、住宅及びグランドの完成をみた。あみだ原地籍は西側が畑地東側は山林として利用してきたのであるが、昭和53年宮田村土地開発公社が、小規模工業団地として買収した。この場所が小田切川と天竜川とにはさまれた細長い段丘になっているので、この段丘を伊那峡に通ずる道路面迄削り取る計画がなされたため、全面にわたって事前調査が必要となり、昭和55年８月11日より、あみだ原発掘調査団によって同年８月末まで調査が行なわれた。その結果弥生式後期の住居址１軒、平安時代末の住居址１軒、土坑２基、中世の井筋等を発見したのである。

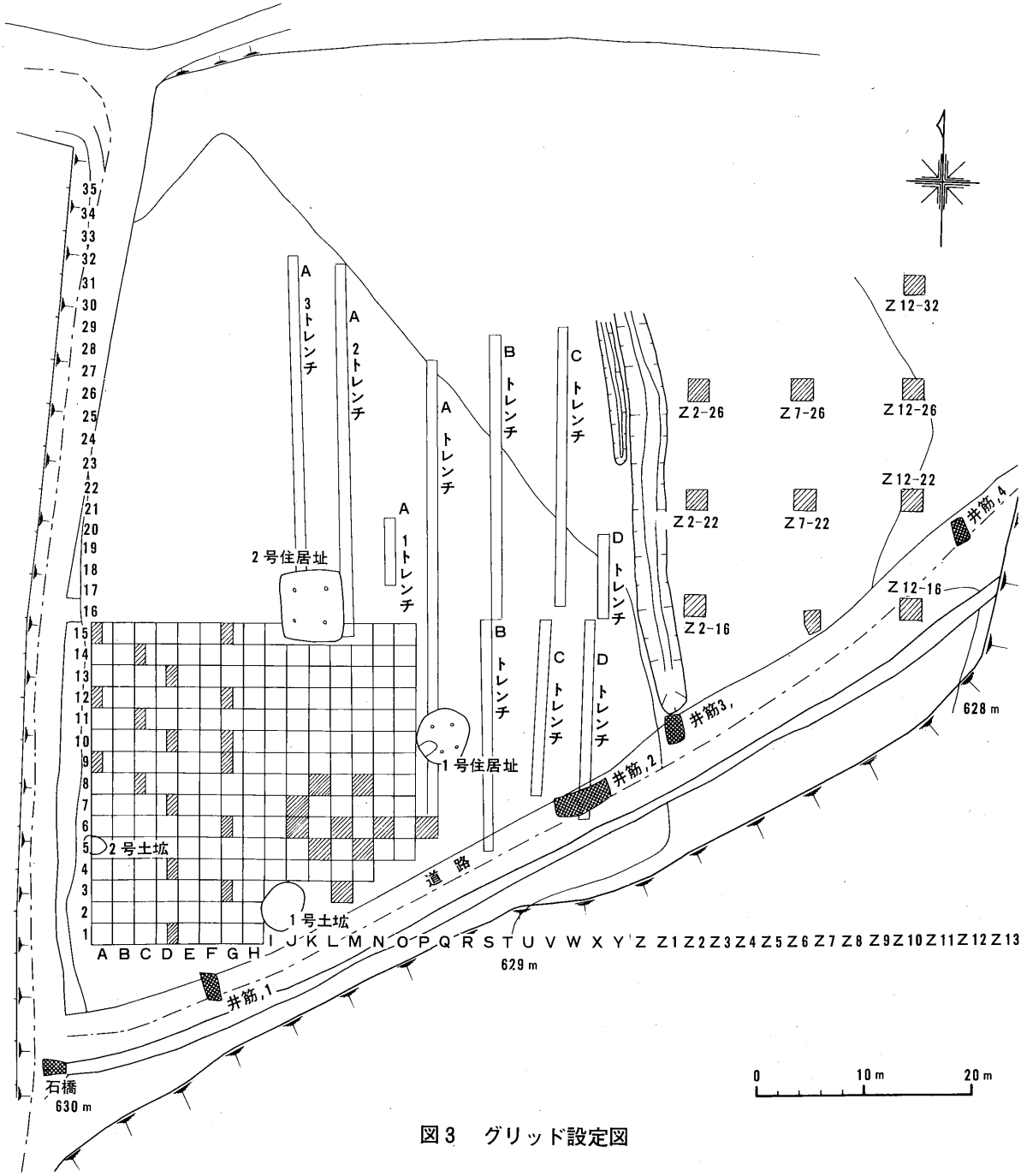


図３　グリッド設定図

Ⅲ調査の結果

第1号住居址（図14・15・16・19）

本住居址は、P.9～11グリッドにまたがって黒褐色土層面の下に落ち込みが確認された。覆土は黒褐色土である。住居址のプランは隋円形、径4.8m、壁高60～70cmを測る。壁面にはなんらの施設も窺えなかった。壁外にも同様何の施設も確認することができなかった。床面は、黄色砂質ロームを基盤としており、あまり踏み固められていなかった。竪穴内では、P.1～P.7の7本のピットが確認されたが、P.1～P.4を柱穴とするも、他は使用不明のピットである。主軸はN10Wの方向をむく。カマドは石組粘土カマドである。袖石は左側は残っていないが左側の石組の石がカマド内に2個落込んでいた。煙道は壁ぎわから耕作のため完全に破壊されている。カマドの袖石間は60cm、奥行1.3mある。焼土の厚さは12cm堆積しており、長く使用されていたことがうかがわれる。

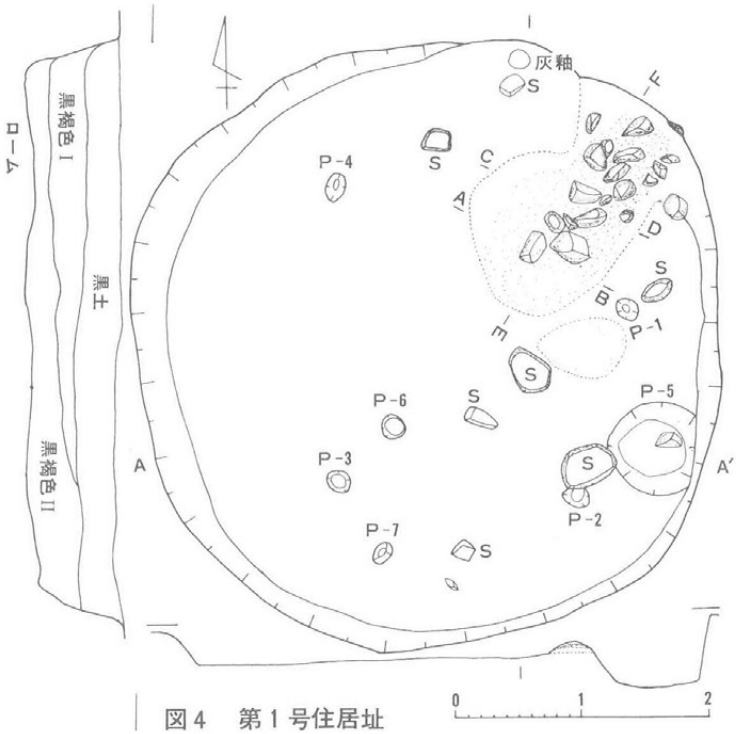


図4　第1号住居址

遺物（図15・16・17）

33～24・26は土師床面出土、17～24までは覆土中より出土の弥生式後期座光寺原式に比定される土器、25・27はグリッド出土。35は灰釉陶器皿、36・37・38は灰釉陶器碗。平安時代10～11世紀と考えられる。

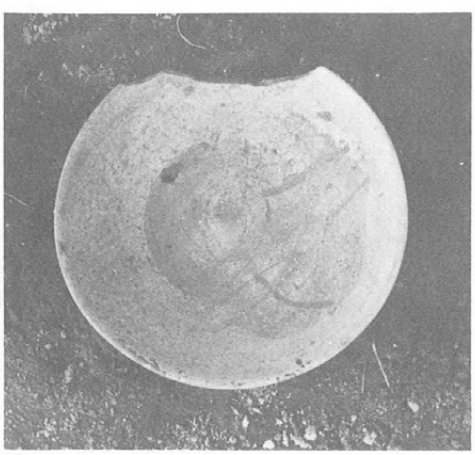


図5　遺物出土状態

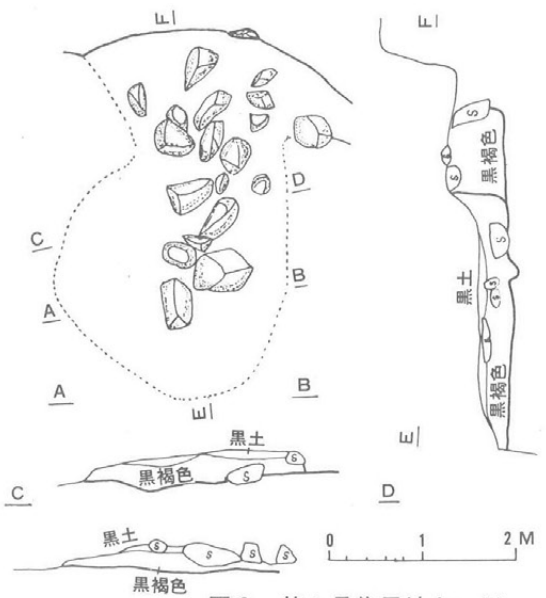


図6　第1号住居址カマド

第２号住居址（図３・７・８）

第２号住居址は、Ｇ－15～18に発見された住居址である。東西6.2ｍ、東北6.67ｍの隅丸方形の平面プランをもち、主軸方向はＮ７°Ｗを指す。壁高は、黒褐色土層面より確認された。北側の壁で72cmを測る壁は垂直に立ち上る面と南壁の一部に27度の傾斜の壁面である。壁面には特別な施設は認められなかった。壁外にも施設は発見されなかった。床面は砂質ロームに掘り込まれていて全面よく踏固められていた。柱穴はＰ.１～Ｐ.４の４本柱である。柱穴は４個共隋円形で直穴、柱１は（14×８－53cm）、柱２は（17×10－69 cm）、柱３は（22×８－69cm）、柱４は(16×８－50 cm）、柱間間隔柱１～柱２は柱真芯３ｍ、桁行、柱３～４は2.97m、共に桁行。柱２～３柱真芯で3.10m、柱３～４は柱真芯2.98m、梁間と考えられる。本柱居址は桁行と梁行はあまり差が認められない構造をもっている。Ｐ.５は南壁に接して作られているもので、Ｐ.６、Ｐ.７、Ｐ.８の延長上にあるところより棟を支えるに関係あるはピットかもしれない。炉は、住居址の主軸線上にあり、底部を欠いた甕を正位にきちんと埋めた埋甕炉である。附近には焼土と土器が散在していた。

遺物（図15・16）

1.は縄文中期曽利系の土器、２～10は波状文が施された甕形土器、11・14は刷目がわずかに窺える土器、13は波状文と簾状文が施されている壺形土器。30は埋甕土器、28は緑泥変岩撰形打製石斧、29は黒燿石製の石鏃、31は硬砂岩分銅形打製石斧。32は硬砂岩短冊形打製石斧。

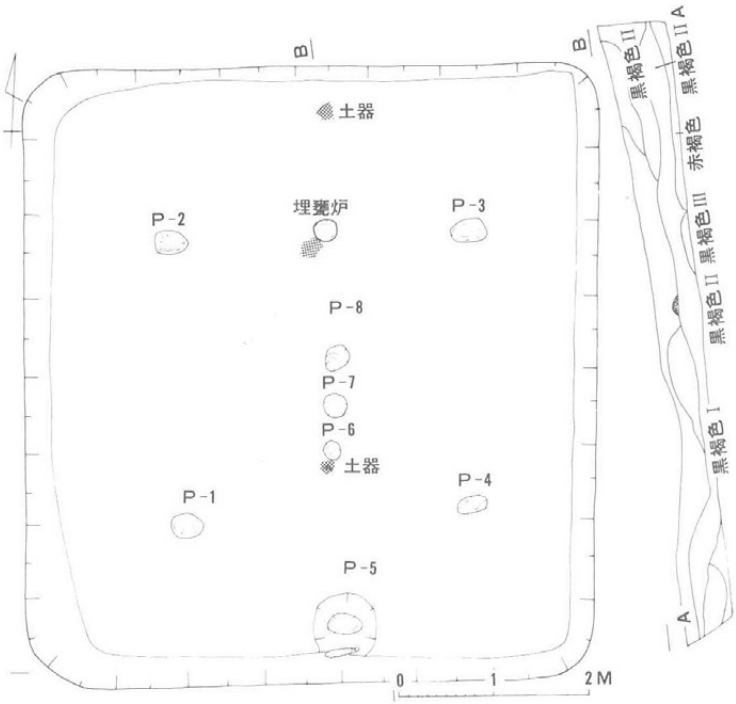


図７　第２号住居址実測図

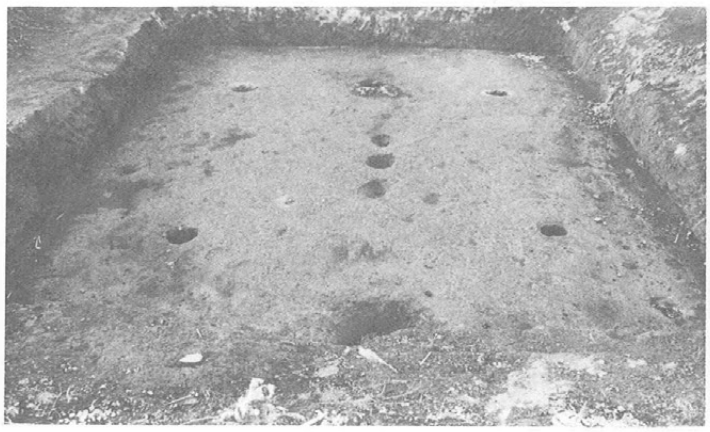


図８　第２号住居址

丸山井・溝状遺構（図３・９・10・11）

今回あみだ原地籍が、小規模工業団地の造成が行なわれることに当り、この場所を通っている丸山井が一部分破壊されることになった。このため、現況保存ができなくなったので、やむなく記録保存の処置をとることになった。記録による保存は、グランドの南東坂頭の石橋を基点として、中越部落より大久保部落を経て駒ケ根市下平に通ずる堀割迄の間約231 mを対象として測量し必要な調査を行うことにした。井筋の巾は1.5～2m、深さ0.7～1.2m内外を測る。井の底部はローム層中にあったが、濁水が多かったようである。丸山井の作られた時期は明らかでないが、天保13年春の改修は大工事であったので藩に願い出て、他村からの寄人足を得て実施している。覚書には大久保耕地江大田切より、用水惣間数丸山井口より天竜川迄三千四百廿三間。比訳三百廿四間、丸山より井口迄。五百三拾四間ー丸山二ツ谷南大田切追分迄。七百間、大田切追分より三つ塚横道まで。六百廿拾間ーそれより海道まで。五百三拾間ー海道より用水追分迄。二百八拾間、用水より坂下落迄。百拾間ー狐塚揚井至難場之分惣間。七拾四間、なしの木井右同断（註前河原）〆三千四百廿三間。内二千九百八拾四間ー丸山井口より狐塚落口迄。四百五拾九間、落尻所之井筋。右を天保十三年寅春寄人足願御出役被遊右井筋之分切払被成下候、此後右井荒候節は右間数相心得願可申候。為二心得　記置候、天保十三年春は、一方において七ケ村大井筋の村々が宮田井口復活の大工事を起し、世紀の大水論を展開した年でもある。こ

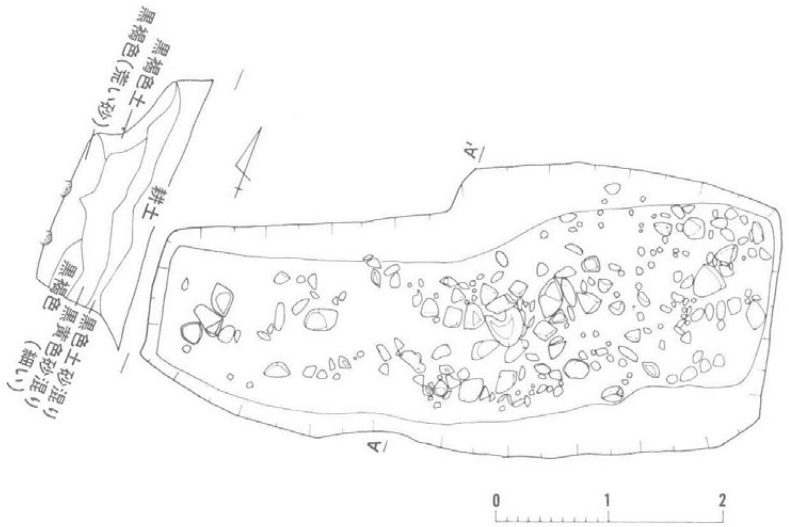


図９　溝状遺構実測図

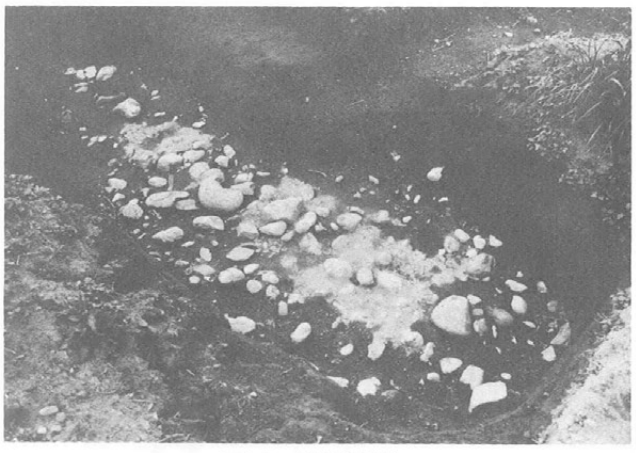


図10　溝状遺構

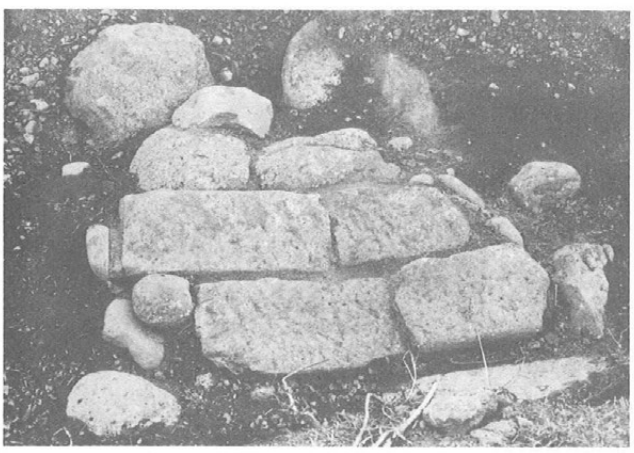


図11　丸山井の石橋

の文書は大久保部落が後世に永く丸山井（大久保）の水利権専有を語り伝えるために書き残したものである。（この記録は大久保区有文書による）

溝状遺構（図３）

この古い溝状遺構は、初め丸山井ではないかと思われたのであるが、よく調べて見ると、まったく、別のものであることが確認された。この溝状遺構は丸山井と石橋の地点で偶然にも合致しているので丸山井と誤解されたことになった。溝状遺構は石橋より10m ぐらい東より東北の方向に向ってのびているようである。これも後で解ったことであるが、この溝状遺構が埋っている位置は、中越部落より大久保に通ずる古い道路敷であることがわかった。今回の調査ではこの溝状遺構を全部掘ることが不可能であることになったので、実測図に示された個所を調査し大方の見当付をするにとどまってしまった。溝状遺構は上部巾で平均２m、底部で約１m、深さは平均85cmを測る。溝の底には拳大～頭大の花崗岩の自然石が敷詰た状態で検出された。溝の埋没した状態を見ると、底に近い場所では砂の層が堆積しているのが窺われるので、おそらく、水も流れたのではないかと考えられる。出土遺物は灰釉陶器片が出土された外は検出されなかった。

第１号土坑（図13・14）

本址はG-2･3･4グリッドに発見された土坑である。東西3.8m、南北4.5m の隋円である。遺物は平安の上師が出土した。

第２号土坑、東西2.2m、南北１m の土坑である。遺物は発見されないため時期は不明である。

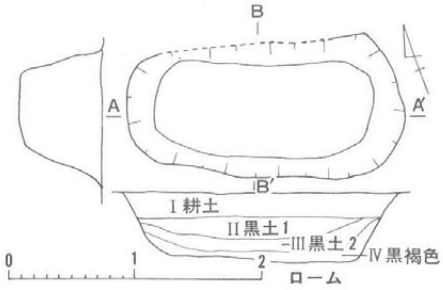


図12　第２号土坑実測図

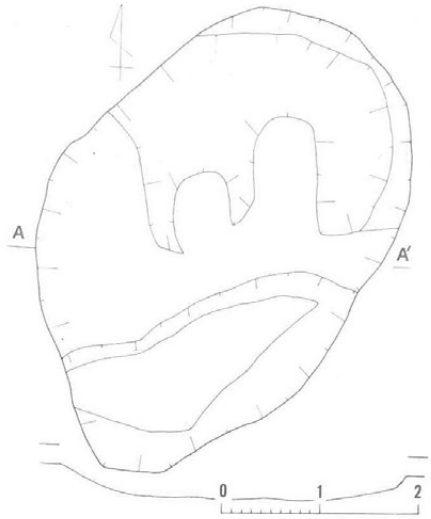


図13　第１号土坑実測図

図14　第１号土坑

所　　見

あみだ原遺跡は、宮田村大久保部落の北天竜川右岸段丘上小田切川とに峡まれた標高622～623ｍの舌状台地に所在する遺跡である。

本遺跡の附近に分布する遺跡について見ると、滝ケ原遺跡は、長野県企業局が県営住宅用団地を計画するに当り、この地籍が埋蔵文化財包蔵地に指定されているため、宮田村教育委員会が、昭和48年度緊急発掘を実施した遺跡である。その結果、縄文中期後葉の住宅９軒、配石１、附近に消滅した滝ケ原古墳があった。古墳は伝えるところによると、直径５ｍ、高さ1.5ｍの円墳で内部は木棺直葬であったと松下国房氏が話してくれた。また、直刀が出土したが行方不明である。こうしたことから古墳時代後期の古墳と推定される。

駒ケ原南遺跡。昭和52年５月19日～７月２日まで、県営圃場整備にかかる事前に行う緊急発掘として、宮田村教育委員会が実施した遺跡である。遺跡は太田切川が天竜川に合流する右岸の段丘上に位置し、標高640～644ｍにわたって分布する。調査の結果、縄文前期初頭中越遺跡でも１群にあたる住居址４号～10号住居址まで７軒が発見された。このことは、中越遺跡との関連を考える上に重要な位置を占める遺跡である。そのほか、弥生時代後期前半座光寺原式に比定される住居址３軒が発見された。この時期の遺跡は、同村南割姫宮遺跡(30軒の大集落址)、向山遺跡等が発見されている。

方形周溝墓、本遺跡からは住居址群の東側に３基の方形周溝墓が発見された。本村では方形周溝墓はこれが初見である。姫宮遺跡の土坑群と本遺跡の方形周溝墓との対比などこの時期の墓制の有方の研究に多くの問題を投掛けてくれた。天竜川水系には弥生中期以降方形周溝墓は、下伊那で権現堂前、滝沢井尻、天白、石子原、座光寺原、帰平原、田村原、清水、さつみ、的場、清水、上伊那、辰野町樋口五反田遺跡、伊那市西春近小出南原遺跡、宮田村駒ケ原南遺跡。諏訪では、真志野本城、平出遺跡等で発見されている。これらの方形周溝墓は弥生時代後期の後半に造られたもので、その数は40墓余を数える。このことは、天竜川水系に於ける古墳発生前の墓制を研究する上で重要な資料である。

狐塚、この狐塚は、宮田村大久保部落の北東天竜川右岸段丘下狐塚地籍にあり、宮田村遺跡番号36番に当る。この狐塚は昭和２年天竜川から引水している井筋の改修工事の折に、小田切留吉氏が井筋の床掘中に２箇の甕形上器を発見すたことにより確認した遺跡である。この狐塚の現況は、現在の水田の面よりも1.9ｍほど高い場所にあり、東西17ｍ、南北８ｍ、高さ50～90㎝高くなっている。土地改良前は南側にもっと張り出していて小高い丘であったと言う。この塚の北側山手を丸山井が通っている。丸山井の終点は古文書に狐塚と書れているが、狐塚はこの場所に当るのである。今回の土地改良工事では、天竜川から揚げだ古い井筋に添って深さ２ｍの排水路を作った為に、狐塚は更に破壊される運命となったのである。こうした経過をたどった狐塚からは、弥生時代前期と言われている器面に条痕文を施した甕形土器の発見と言う事実により、稲作農耕にかかわりのある文化を物語る重要な資料を提供してくれた遺跡（図17）となったのである。

西垣外遺跡。本遺跡は昭和38年11月27日、加藤光雄氏が長芋を掘った折発見した竪穴住居址である。住居址の所在は小田切喜三治氏の水田と、加藤梅雄氏桑園との境あたりだという。発掘は大田保・友野良一・加藤光雄氏、そのほか地元の方々の協力を得て行われた。調査の結果４×５m深さ１～1.3m長方形で、北側壁に石芯粘土竈をもつ竪穴住居である。竈内出土の胴長の甕形土器と、須恵器の短頸壺が出土した(図18)。おそらく、７世紀末～８世紀代と考えられる。

つつじが丘。今回あみだ原遺跡の調査の折、確認された遺跡である。終戦前は食量増産のため開墾されたが、戦後昭和39年住宅団地として造成された場所である。昭和42年東側の畑地をつつじが丘グランドとして造成された。造成が行われる以前は、中程に小高い丘があり北側にやゝ傾斜していて、その傾斜の個所に、石器や土器がちらばっていたと言う。おそらく、現在住宅地になっている所もグランドと同様遺跡であったろう。

今回の調査の結果は、縄文時代中期後葉の土器片が表採ではあるが発見されたが、それに伴う遺構はついに発見されなかった。本遺跡の南には滝ケ原(縄文中期末)の遺跡があるので、おそらく、この遺跡のなかにも分布しているものと考えられる。

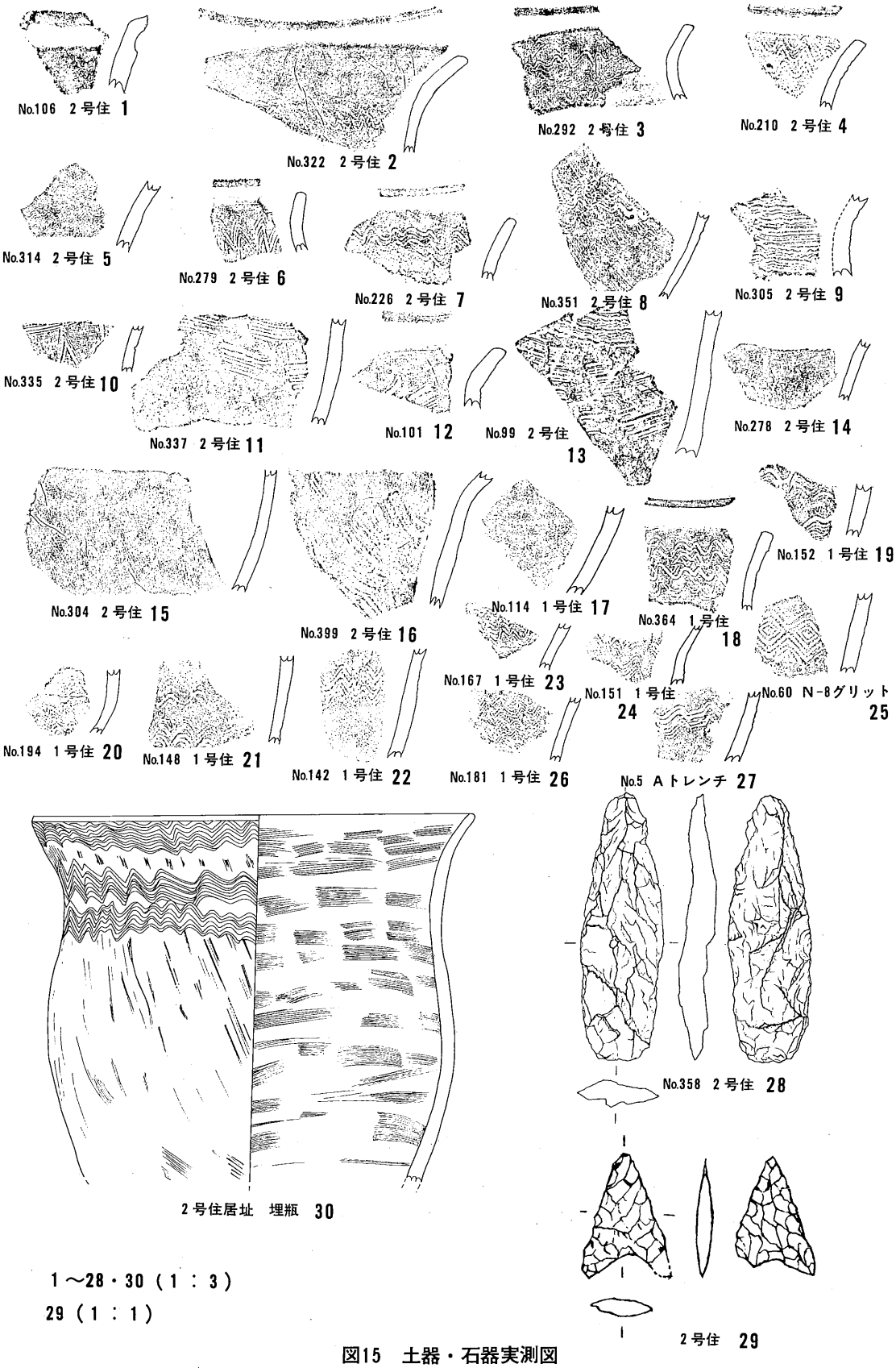
弥生時代後期の住居址は、地表下1.2～1.3m以上に深い所に埋没しているため、破壊を免がれたものであろう。この住居址の持筆すべき点を二･三拾ってみると、住居址は大形の分類に入る方である。柱穴は住居址の主軸の方向に向って４柱穴共東西の方向隋円に掘り込まれていることより、梁行は東西に桁行は南北に骨組があったと考えられる。従って棟の方向は、南北に通ることになり屋根は原始入母屋造りと考えられる。

住居址の北側、東西柱穴の間に発見された埋甕炉は、口縁部がゆるやかに開いた器形で、口縁部の下より頸部にかけて三段に櫛状器具による波状文が施された土器で、弥生時代後期前半に位置される土器である。こうした位置にある埋甕炉は、伊那地方には多く見られるところである。

平安時代の住居址。この時期の住居は大方は方形が多いのであるが、本住居址は隋円形であることに注目される。現在長野県南信地方に発見されている住居形態は方形が圧倒的多い。出土遺物は愛知猿投産で、黒色14期の灰釉陶器と考えられる。

溝状遺構。今回発見された溝状の遺構は残念なことに、その一部の調査が行れただけで終ってしまったので、その性格を明らかにすることができない。ここでは、調査中に考えられた事実を記して参考としたい。1.弥生時代の環濠ではないかとする考えと、調査した断面に砂の堆積した層が発見されているところから、水路か排水溝のいずれではないかという考え方もある。遺物は中世陶器の小破片のみで、時期的の決定にはいささか問題がある。

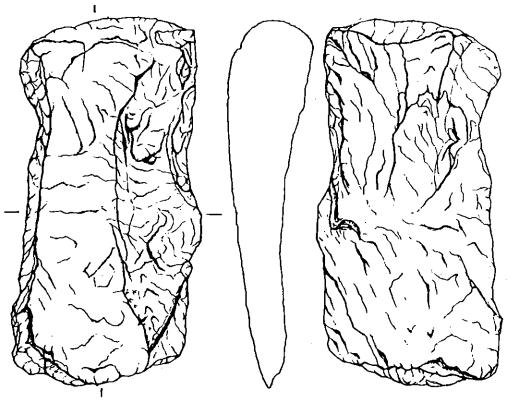
今回の調査に当って宮田村土地開発公社、田中哲尚氏には特別の御支援を賜わったことを紙上をもって御礼を申し上げる次第である。また、地元大久保の関係された皆様、特に小田切喜三治氏には御多忙の折にもかかわらず、段丘の湧水個所、古堂跡、熊野神社前の本沼田、狐塚、堂沢川の位置ナシノ木川跡、大久保扇状地の地形・地質等の調査についてご協力をいただき心から感謝申し上げる次第である。



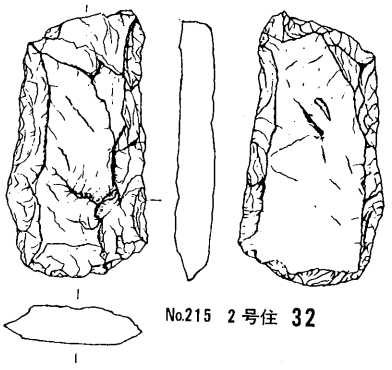
1～28・30（1：3）

29（1：1）

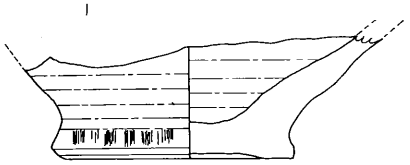
図15　土器・石器実測図



No.339 2号住 31

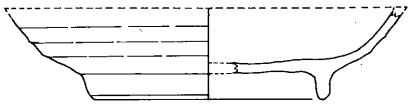


No.215 2号住 32

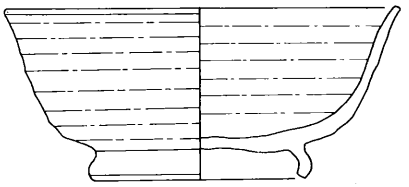


No.331 1号住 土 33

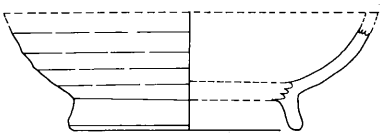
No.336 1号住 土 34



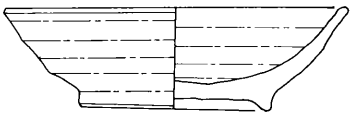
No.121 1号住 灰 35



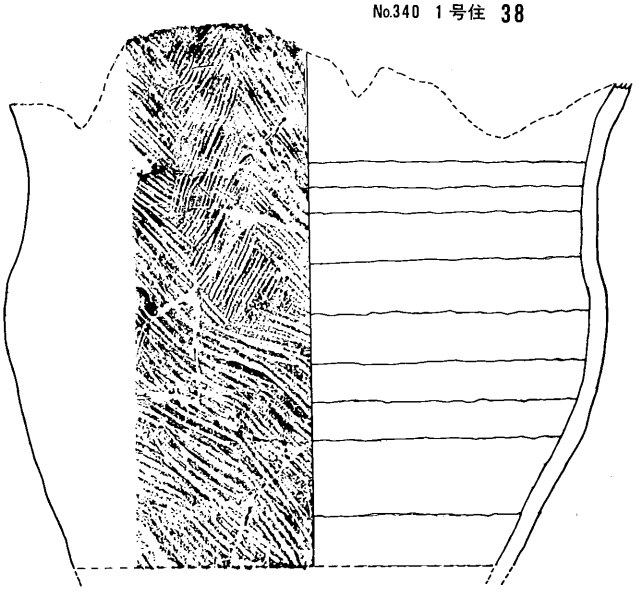
No.A-1トレンチ 灰 36



No.284 1号住 37



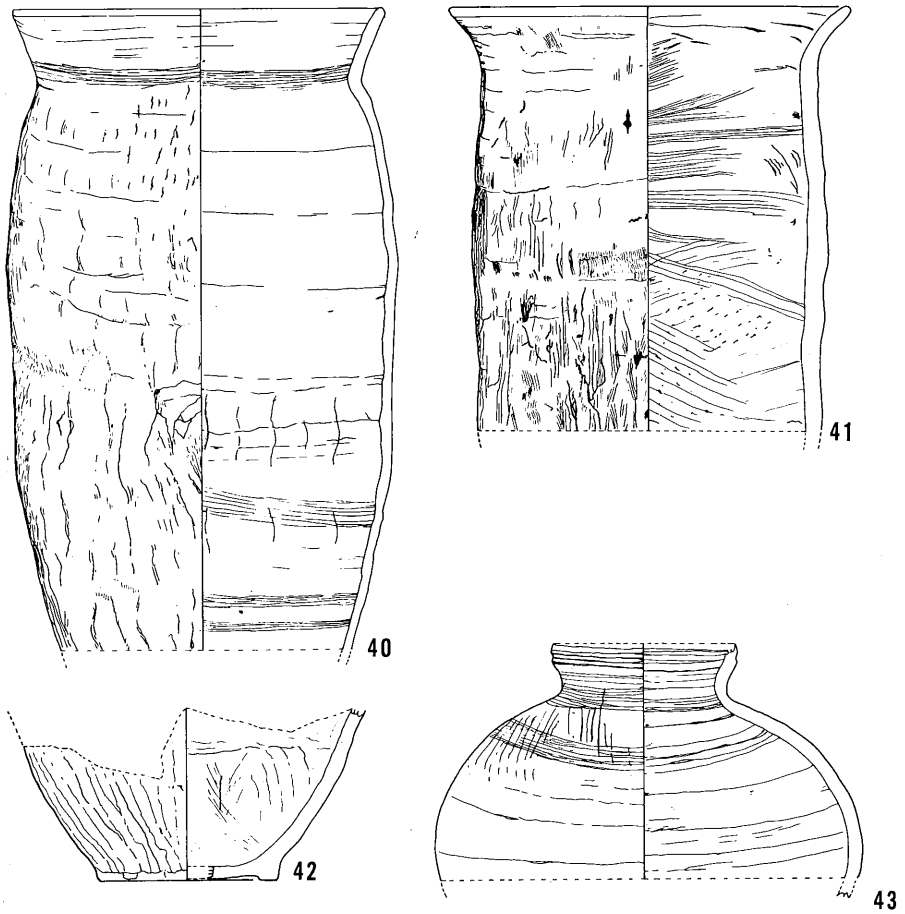
No.340 1号住 38



大久保、狐塚出土土器 39

31～39（1：3）

図16 石器・土器の実測



40～43（1：4）

図17　大久保西垣外住居址出土土器

	遺跡名
1	丸山井
2	ナシノキ川
3	堂沢
4	溝状遺構
5	古堂
6	水車跡
7	湧水
8	熊野神社
9	湧水
10	堂跡
11	湧水
12	湧水
13	狐塚
14	昔族人山伏塚
15	丸山井の石橋
16	下牧大保保線
17	両垣外遺跡
18	埋没古木発見個所
19	本沼
20	大久保扇状地
21	あああらご湿地
22	湿地帯
23	駒ヶ原南遺跡
24	滝ヶ原遺跡
25	つつしヵ丘遺跡
26	狐塚上遺跡
27	大久保前河原
28	あみだ原遺跡

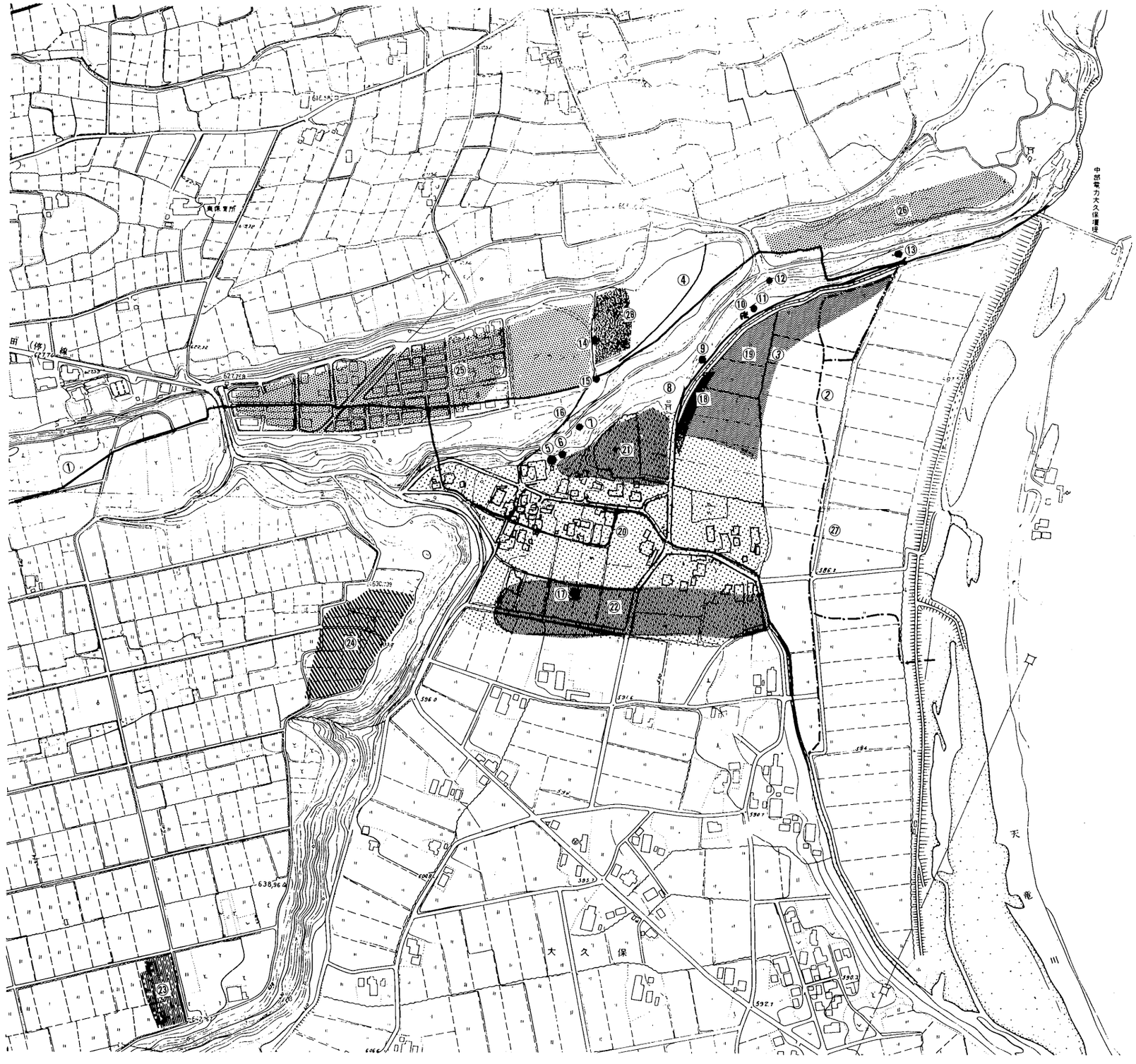


図18　大久保遺跡分布図

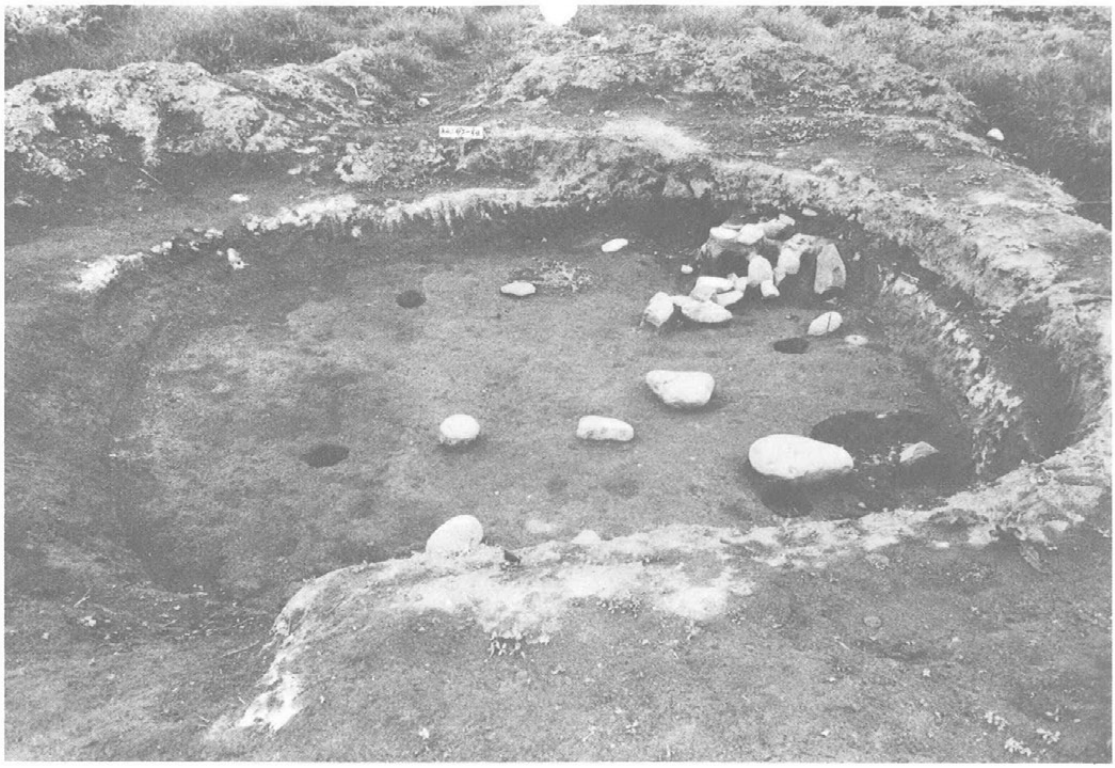


図19　第１号住居址

※阿智・飯田・宮田地区、長野県中央道埋蔵文化財調査報告書 45年　日本道路公団・長野県教育委員会
※　　長野県中央道埋蔵文化財調査報告書　　日本道路公団・長野県教育委員会
※楢崎彰一　　瓷器の道　(1)　信濃における灰釉陶器の分布
※大場磐雄　「灰陶陶器」平出遺跡調査会編「平出」第二編第四章　昭和30年
※友野良一他　松　戸　　南信土地改良事務所・宮田村教育委員会　昭和52年
※友野良一他　駒ケ原南　南信土地改良事務所・宮田村教育委員会　昭和53年
※友野良一他　姫　宮　　南信土地改良事務所・宮田村教育委員会　昭和51年
※岡谷市その４　長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　　昭和52・53年

あみだ原遺跡

緊急発掘調査報告書

昭和56年３月20日　印刷
昭和56年３月25日　発行

発行所　長野県上伊那郡宮田村
教育委員会

印刷所　長野県諏訪郡下諏訪町
㈱オノウエ印刷